

II 自立共生的な再構築

Ivan Illich (1973) "Tools for Conviviality" Marion Boyars Publishers, pp.10-45.

(=イヴァン・イリイチ (2015) 『コンヴィヴィアリティのための道具』渡辺京二・渡辺梨佐訳、筑摩書房 pp.37-107)

文責：K原

<II章の概要>

II章では、道具とはなにかと、人と道具・社会の関係性(過去・現在・理想)について論じている。焦点は人間ではなく道具にあり、自立共生的に(コンヴィヴィアルに)道具を使おうという話ではなく、コンヴィヴィアルになるための道具を使おうという理想が語られ、産業主義的社会において「目的と化するに至った手段」となった道具を見分ける方法を示し、自立共生的社会のためのガイドラインとしている。

<なぜ道具の話をするのか? -社会の危機を解決するため>

- どのような道具を使うかによって、社会の「危機」を解決できるかどうか決まるため。
- イリイチによれば、人と社会の関係性は、道具によって決まる。人は、自分自身と社会とを、道具によって関係づけている。人には、道具をマスターしている(主人となっている"work for")人と、道具(操作的な道具)に使われている人がいる。道具との関係性によって、自己イメージが決まってくる(p.59)。

→社会について考えるためには、道具との関係性を考えることが必要不可欠である。危機を解決するもしないも道具次第である。

*ここで述べられている道具との関係性はどちらも自立共生的ではないという理解で合っているか?

- 「私の主題は道具であって意図ではない」「私は、道具を使う人々の性格の構造ではなく、道具の構造に焦点を合わせようと思う」(p.45, 48)

→ここでは人がいかに道具を使うかを議論したいのではなく、人がどのような道具を使うかを議論する。

<危機とは何か? -道具が手段ではなく目的になっている産業主義的社会>

- 私たちは道具を手段ではなく目的にしてしまっている(例:教育の発明)。(p.53)
- 一度人々の知識水準を定義したり計ったりする機関の権威を受け入れると、人々は彼らにかわって適切な他の水準を定義してくれる機関の権威をも容易に受け入れるようになる。(p.56)

<道具の話をして何がしたいのか？ -共に働く新しい道具が求められている>

- イリイチによれば、今の社会は道具が目的と化している。本来道具は手段であるはずなので、その「目的と化するに至った手段」を見分ける方法を提供したい。(p.45)
- 機械を奴隷の代わりにしようとする、機械は人間を奴隷化する。現在の産業主義的社会的諸制度はそのようなことをしている。このままでは危機は解決できない。
- そのため、自分のかわりに働いてくれる道具（"work for"）ではなく、自分と共に働いてくれる（=奴隷にも主人にもならずすむ "work with"）新しい道具を必要としている。(p.38)

◎なぜ「自分のかわりに働いてくれる道具」ではダメなのか？

- 「機械は奴隷のかわりをすることができる」(p.37) と考えると、そのような目的で機械が用いられたとき、機械は人間を奴隷化するため。それは"work for"であり、"work with"ではない。

<イリイチの言う道具とはなにか？ -合理的に考案された工夫すべて>

- ここでイリイチが言っている道具というのは、物理的に触れるもの、感じることもできるものだけではない。簡単なハードウェアや（例：注射器、建築材料、モーター）、大きな機械（例：自動車、発電装置）だけではなく、工場のような生産施設（"productive institutions"）、商品の生産システム（"productive systems" 例："教育" や "健康" といった触知できないもの）も含んでいる。なんらかの理由で合理化される必要があったものすべてを道具という。(pp.58-9)

<自立共生的な道具とそうでない道具とはなにか？>

- 自立共生をはぐくむのは、人ではなく道具である。(p.61)
- 道具は、自立共生のための道具と、そうではないものに分けられる。自立共生的な道具は、ある人がそれを使っても、ほかの人がそれを同等に用いることを妨げない。使用の際に前もって許可を必要としたり、それを使わなければならないように強制したりしない。一方のそうではないもの（反自立共生的な道具）は、道具の考案者たちの目的や期待のみ決定できるようなものである。 =独占、専門、分化 (p.59)
- 制度 (institutions) にも、自立共生的な道具であるものがある（例：電話）。(pp.61-2)

*果たして電話は本当に誰にとっても常に自立共生のための道具でありうるだろうか？「文字」や「言語」は常に誰にとっても自立共生的な道具か？

*ここで systems ではなく institutions を使っていることに意味があるのであれば、institutions は何らかの目的による人の結びつきや組織を表しているの面白いと思った。

◎いろいろな道具

- Hand tools (「手に頼る道具」) は、多目的でありうる。人間のエネルギーを変換しているに過ぎない。自立共生のためのツールである。ただし、この道具の使用が人為的に制限されることがあれば、それは自立共生のための道具ではなくなる (p.59)。
- Power tools (「パワー・ツール」) は、人間のエネルギーを変換しているものと、機械が自分でやってくれちゃうものがある。(例：ジェット機) (p.60-1)
- (物理的に触れない道具) 誰が所有しても「破壊的」な道具もある。(例：義務性の学校制度) (p.69)

◎なぜ「義務性の学校制度」は誰が所有しても「破壊的」なのか？

- 「特定の年齢ごとの強制的な競争は、より早くスタートしたもの、より健康なもの、教室外でよりよく知識を装備されたものに有利に働くにちがいない」 (p.100)
- そのような競争によって必然的に社会は階層化される。より多くの教育を消費した者は社会全体にとってより価値があることになる。しかしそれは公正な社会ではない。

<これまでの道具との関係性>

- 道具は、人間のエネルギーを変換したり、それ以上のエネルギーを生み出すものである。時代とともに、まず自分を維持するエネルギー、次に自分を維持するのに必要とされるエネルギー以上のものが生み出された。これによって、他人にコントロールされる (= 政治的支配が及ぶ) 「自分たちの力を他人の決定にゆだねるように強制される」可能性が生じた。余剰のエネルギーを少数者が管理した (p.74)。
- それからさらに新しい力を手に入れた。その新しい力は時間との新しい関係を意味した。これまでは働いた結果がお金になることはあっても、お金がお金になる (利子) ことはなかった。これにより「時間がお金のようなもの」になった。

* p.79 に例文がいくつか挙げられているが、見事に英語の主語を「お金」に変えても完全に動詞として成立する文になっている。面白い。

→自分以外の、それ以上のエネルギーを「所有する」ようになる。"work for"への始まり

- メキシコの例によって、持つ者と持たざる者 (have) の違いが説明されている。(よりよい輸送と高速の同一視 (p.89-92)、労働者へのよりよい基準の規定 (pp.95-7))

→いったん「よりよい」基準が決められると、それを求めることが目的となり、それを持たざる者は満たされなくなる。

<イリイチの言う道具との関係性 (理想) はどのようなものか？>

- 自立共生的な社会の根本は、生存 ("survival")・公正 ("justice")・自律的な仕事 ("self-determined work") の3つである。 (p.43)

- 人は道具がなければ生きていくことができない (=生存?)。
- しかしじゃあ何かしらの道具が与えられていればいいかというただそれだけではなく、それがどのように作られるかに発言権をもったり、品物をどうするかを決められる自由=自立共生があるべきなのに、それが剥奪されてしまっており(=公正ではない?)、ただの消費者になっている。この道具との関係性は、産業主義社会の技術官僚支配によるものである。これは自立共生的社会とは異なる。(pp.39-42)
- 「公正な社会とは、一人の人間にとっての自由が、他人にとっての同等の自由が生み出す要請によってしか制限されることのない社会である」(p.100)
- イリイチは人間活動の市場的特徴とそこで使われる道具を三類型に分けている：仕事 (work) で使われる道具、労働 (labor) で使われる道具、「操作的な道具 (operated)」(pp.80-4)の3つである。(=自律的な仕事 work)
 - * ここで特に面白いと思ったのは、「教師が学校で操作的に働くように」(p.82)の英語表現(英語版 p.22) "Teachers operate in schools." Operate という単語は、何かを注意深く見ていないといけないものに使うため、一見奇妙な表現にも思われるが、この表現は言い得て妙な感じがした。Work も labor も operate も日本語で「働く」と表しうるけれど、全然意味が違う。

◎人間活動の市場的特徴：work と labor と operated (pp.80-3)

- 仕事 (work)：自律的な仕事(自立共生的)。work 自体は市場で売買できないが、その結果生み出されたものだけなら売買できる。自分で決めて組織だてかたちづけることができる。
- 労働 (labor)：それ自体が市場で売買されることができる。農業労働は主人のために主人の命にもとづいて行う労働だった。
- 機械の操作 (operated)：機械を操作するのに資格を必要とし、特権を与える。そのためには審査を受けなければならない。「誰」がわからない。
 - * (pp.80-3) work はゲルマン語系であまりマイナスのイメージはない。labor の語源は slave だそうです。圧倒的マイナスな印象…でもそれよりも operated のほうがマイナスということか。

<全て自立共生的な道具であればよいのか？>

- 自立共生的な社会は、誰かによって操られることの最も少ない道具によって構想されるべきであって、機械全てを(自立共生のためのものではなくても)拒否するべきではない。(p.58)
- イリイチの言う自立共生的な社会の基本は、操作的(道具に使われるような)な道具が存在しないことではない。この本でイリイチは反自立共生的で操作的な道具を見分けるための基準を提示しているが、それはあくまで自立共生のためのガイドラインであって、反自立共生的で操作的な道具を排除するためのものではない。社会の成員たちが自分た

ちの自由を擁護するためのガイドラインである。(p.65)

<危機の解決のために必要なこと>

- 今なら「自立共生的でしかも効率的な社会にあうような道具」を考案することができる (p.83)。
- 今日 (少なくともこの本が出版された時代 1973 年は、「よい」「悪い」を区別する基準ができてしまっている。例として4年間の学校教育を途中でやめることは「悪い」、脱落者と表現されている (P.98)。学校という手段による教育が、社会による機能をはたすために不可欠のように構築されている。これは公正な社会ではありえない。
- 今日の諸制度が欲求不満をひきおこすものとなる限度を確認しなければならない。また、私たちの道具が社会全体を破壊するものとなるもうひとつの限度を認識しなければならない(p.107)。

→いったん基準が決まると、本当はそれは手段であるはずなのに、それを満たすことが目的になる。その基準 (=限界?) がどのようなものか認識しなければならない。

【議論したい点】

- * (pp.61-2)イリイチは例えば電話を自立共生的な道具の例として挙げていた。果たして電話は本当に誰にとっても常に自立共生のための道具でありうるだろうか? 「文字」や「言語」は常に誰にとっても自立共生的な道具か?
- iPhone (スマホ) は? LINE は? その道具をどう定義するか?
- 学びの「危機」は、イリイチの論を借りるとどのように考えることができるか?

【個人的に確認したい・謎だった点】 (*は上に記載しているもの)

- * (p.59) ここで述べられている道具との関係性はどちらも自立共生的ではないという理解で合っているか?
- なぜ conviviality を「自立共生 (的)」と訳したのか。なぜ自律ではなく自立だったのか。

【感想】 (*は上に記載しているもの)

- * (p.61 英語版 p.22) ここで systems ではなく institutions を使っていることに意味があるのであれば、institutions は何らかの目的による人の結びつきや組織を表しているの面白いと思った。
- * p.79 に例文がいくつか挙げられているが、見事に英語の主語を「お金」に変えても完全に動詞として成立する文になっている。面白い。
- * 「教師が学校で操作的に働くように」 (p.82) の英語表現 (英語版 p.22) が面白いと思った ("Teachers operate in schools. ")。Operate という単語は、何かを注意深く見ていないといけないうものに使うため、一見奇妙な表現にも思われるが、この表現は言い得て妙

な感じがした。Work も labor も operate も日本語で「働く」と表しうるけれど、全然意味が違う。

- * (pp.80-3) work はゲルマン語系であまりマイナスのイメージはない。labor の語源は slave だそうです。圧倒的マイナスな印象…でもそれよりも operated のほうがマイナスということか。
- あくまでも道具に焦点を置いた議論ではあるが、多様性とはなんだろうと思った。イリイチにとって学校はあくまでも学校制度であって、「～～な学校」という多様性はいったん考慮せず議論を進めている印象を受けた（度々言及はしているが）。そのようにしたからこそ「道具」を焦点に置いて考えられるのだろうとも思った。仕事、労働、operated の分け方も面白いし、道具の分け方も面白いと思ったが、そのように全て単純に分けられるものかどうかはわからない。